その五感とされる視覚（眼）、嗅覚（鼻）、聴覚（耳）、味覚（舌）、触覚（皮膚）の五つの感覚と、五感の現実感とも異なる六感という霊的感覚があるわけだが、これら五感六感を感ずることのできるのは、いのちあればこそである。それらのことをつないでみると、宇宙をつくる生命元素があって、無限数の星々があって、銀河の中に太陽や地球があって、大地があって、大気があって、呼吸と食物をいただき、一体の「いのち」ができあがる。そのいのちは磁気・磁波・磁性の気をもっていて、そこに五感、六感が発生して、その反応の結果、心が生まれることに成る。そして、その心が人それぞれの人間模様をつくりだすことになる。それが人々の喜怒哀楽や悲喜劇の現実の姿となり、人間社会はとめどなくその変化を繰り返している。

これら人間社会のあらゆる事象は人が生きている証拠でもあるわけだが、この生きているいのちは、一体何ものなのかと考えを巡らしてみた時、いのちは磁気・磁波・磁性体（＝共振・共鳴・共時体）なのだということに気が付いたのであった。

たとえば、ちょっとした物音一つでも耳がピクリと動き、そして、その音の情報を聴覚でとらえて、それが何であるかを察知して対応する。外に向けても自分の心に向けても、すぐにそれらの動きに反応をする。その反応こそ磁気・磁波・磁性体（＝共振・共鳴・共時体）の反応であり、すなわち、それらの磁性こそ、私はいのちの本体であると考えてみたのであった。磁気・磁波・磁性体は共振・共鳴、共時の現象をもたらす唯一の心性媒体だと考えるようになった。

いのちある限り、外的にも内的にも、この五感六感からの情報を元にして反応を繰り返す。その繰り返す反応こそ心の発生であり、反応即心であると考えた。

心という磁気体が、情報を統括する脳に集積記憶として積み重ねてゆく。この心の磁気体はさらに、内的反応体（霊魂＝潜在心）となって、日々の五感とともに心の宝庫として多種多彩な心のいろどりを生みつづけることになる。

いのちの中で循環する情報反応によって、それぞれの個人差のある心を形成し、生み重ねているのが現実の姿であると考えた。いのちは、磁気・磁波・磁性体であり、共振・共鳴・共時現象の発生源なのだ。極言するなら、いのちは磁石だ。私は磁石であなたも磁石だ。いのちの本質はきっとそうに決まっているものだと私は本気でそう考えた。磁気・磁波・磁性体のエネルギーこそ、いのちの絶対調和力の核となるものだと確信に近い考えとなっている。

共時性現象（シンクロニシティー）をもたらす共振・共鳴・共時の世界は、いのちが

磁気・磁波・磁性体だからこそもたらす現象であると思っている。

心も体も同一、同元、同質のもので、一元一体二象体となって現れることがいのちと呼ぶものではないのか。心と体は一人二役のようなものだ。だから生も死もない世界で、心も体も同一同根の生も死も呑み込む混合一体の世界であり、磁気・磁波・磁性をもった調和安定力こそいのちと呼ばれる本体であり、本質であると私は考えている。

いのちは磁気体であればこそ、男と女はプラスとマイナスで引き合う性質をもつとしても不思議とは映らない。磁気・磁波・磁性体であればこそ、宇宙世界の生命元素（原子）とも融合できうるこのいのちといえる。素早く反応する気の流れ、気の動きこそ、心の源流であると考えても決して的外れにはならないであろう。

呼吸と食はいのちの食
食はいのちの元素
生命元素はいのちの光
心は光で体も光
いのちは
磁気・磁波・磁性体

いのちは
共振・共鳴・共時体
共時性現象の基を成す
いのちは心の源流
いのちはものいう光
ものいう光なのだ
みんな光の王子
みんな光の女王

ここで、自分が磁気・磁波・磁性体の共振共鳴のいのちであることを実感ずる旅の触れ合いを見てみることにする。

家を出てから気の向くまま風の吹くままの旅をして三七日目となった、平成元（一九八九）年五月二七日のこと、私は盛岡市へ向けて国道二八二号線を走り続けていた。

いくらなんでも家出同然の無断の旅は、妻にとって心労やる方ない異常なことであったはず。この日までに一度の電話と一度の手紙を出しているから、夫はいずれは戻ってくると思ってはいるだろうが、私にしてもその気運が出始めていたから盛岡を目指して

いたのであった。

国道二八二号は、青森県の碇ヶ関から秋田県を通過して岩手県は盛岡市まで伸びている国道であり、奥羽山脈を縫うようにして、さらに東北自動車道とは右に左に入れ替わってのランデブ・ロードとなっている。

やがて車は県境も間近い鹿角市地内であったが、それまで何度となく目にしているはずの国道標識のことが、心が沸騰したかのように一気に吹き出したのである。標識を見て何が吹き出したかといえば、二八二号線の数字である。標識は横並びに書いてあるから、右から読んでも左から読んでも二八二と口ずさみ、今度はこの数字を縦読みにした。二八二と繰り返したとき、あるコマーシャルがびっくり箱の中から飛び出してきた。上から読んでも下から読んでも山本山で有名なキャッチ・フレーズである。

この国道標識の設置間隔はわからないが、およそ四、五キロに一本立てているようだから、目前に現れては、上から読んでも下から読んでも山本山にならって、…右から読んでも左から読んでも二八二と、何度か心で復唱しては、ついに吹き出して笑ってしまった。一人で運転しながらであるから、モニターでもあれば精神に異常をきたしてしまった人と感じられてしまうかもしれない。こうして悦に入りつつ湯瀬温泉というところを

通過したときのことである。左前方に松茸そっくりの松の木らしい木を発見した。あれ、見事な松茸松だ、と一人言を口にしたときそれは自動的に、上から読んでも下から読んでも松茸松！　と言ってはまた吹き出して笑いだした。再び現れた二八二号の看板を目にして私は運転も忘れて大合唱となった。

上から読んでも下から読んでも…松茸松
右から読んでも左から読んでも…二八二

と繰り返し読んで一人で笑いが止まらない。

実に邪気のないことであったが、気を取り戻して写真に残すため車を路肩に駐車して松茸松に近づいて行ってみたら、そこにはその松の木の紹介標柱が建ててあった。昭和五三（一九七八）年五月二二日指定と記されていた。

この松の木は、鹿角市の天然記念物に指定されている名木であることを知ったが、その指定月日を見て驚いた。五月二二日になっている。五月二二日は、私の生まれた二二日（九月二二日）にぴったり共振共鳴するではないか。この松の木も私も、数のいのちの中では一緒なのである。この松の木が、私を引き付ける磁気・磁波を発振していたにちがいない。そればかりか国道の二八二号線には、私の二二日生まれと妻の八日生まれが組み込まれていて、私の二二の中に妻の八が入っているのである。二八二を縦横どちらから読んでみても、妻と私の命数の響きではないか。

私にこの国道を走らせたのは誰なのか。何もかも知っているお方でなければこんなにうまくお膳立てはできやしないものだ。この旅は、帰宅してから分かったのだが、一日の平均走行キロ数が二二八キロメートル（九、三八三キロメートル÷四一日）となっていた。この二二八キロメートルの平均値はこの時分かる訳もないが、ここの国道が二八二号線であることは、それなりの磁気的共振性をもっているし、そのメッセージ性の高いひびきに満ちている道路であったといえるし、そして、私達夫婦に何かを呼びかけていることが無理なく感じさせられてならない。それはいのちの証しへの道に導くメッセージなのかもしれないのだ。

いのちは磁気・磁波・磁性体で、その出会いの縁を結び、共振・共鳴・共時で、ともに振れ合い、ともにひびき合い、ともに時を同じくする。そのいのちの本質をここに見た思いとなる。

頭の切れる方ならこのことを、確率論で説明するかもしれないが、私には、いのちからの温かいものを感じてならない。いのちは光で、物言う光なのである。

食物から生命元素をいただき自分となったこのいのちは、よりよき人生の調和に満ちて、いのちに添ったレールを走るべくそれを知らされた思いになる。

ちなみにこの松の木の名前は唐傘松（からかさまつ）ではあったが、私達夫婦にとっては上から読んで

も下から読んでも二八二号線と松茸松という、私の心に旅の潤いをもたらしてくれたのであった。また松茸松は、待つだけ待つのだ、とも響くではないか。このいのちのひびきに、神秘の幸せを感じさせられてならなかったのである。

千里ヶ浜で誕生祝い

紀伊半島の南端には田辺湾がある。この辺り一帯は田辺南部白浜海岸県立自然公園に指定されているが、その公園ができるのには、一人の人間が身命をかけた自然保護活動があった。湾に浮く小さな「神島（かしま）」の貴重な植物を守るために立ち上がったのは、博物学の奇才とも呼ばれた南方熊楠であった。特に、粘菌の採集とその学問を究めた熊楠は、昭和四年六月一日、昭和天皇の御前で粘菌学の御進講を行い、このとき熊楠は粘菌の標本をキャラメル箱に入れて献上されたという有名な話が残っており、また天皇もいたく感銘を受けられたそうだ。

熊楠は田辺の街で後半生を過ごしているが、生まれ育ったのは和歌山市であった。幼少からの異才と桁外れの記憶力を本人も不思議に感じていたからであろうが、死んだのちの自分の脳味噌を残すよう遺言を遺した。それは現在、大阪大学医学部で保存されて

いる。すべてにおいて、他に類例のない御仁であった。

かねてより南方熊楠の足跡と身命をかけて守り抜いた神島に巡り会いたいと考えていた私たちは、他にこれといった全体的な計画もなく、その都度行く先々を決めるという実に気ままな旅を続け、田辺駅前のホテルに宿をとることにしたのであった。

この日は平成六年四月九日土曜日。フルムーン五日間の旅は三日目の夕刻に入っていた。四国松山から伊予と巡り歩き、新大阪駅から一五時四四分発くろしお二三号に乗り換え、紀伊半島の紀伊田辺駅に向けて出発、到着は一七時五一分であったから、二時間少々の車中タイムだったことになる。

車中では、どちらからともなく息子のことが話題となった。

「今日は四月九日で淳の誕生日だったなあ」

互いに顔を見合わせながら感慨深げに話をしていた。息子が外国勤務に出向したのは平成二年三月四日のことであった。それから早くも四年が過ぎ、その日はちょうど、三四歳の誕生であったのだ。

電車は一七時五一分に田辺駅に到着した。外は夕暮れ時にさしかかっていた。宿に落ち着く間もなく係の方に「かしま（神島）」と南方熊楠邸について尋ねてみると、「かしま（鹿島）はここから南部駅まで戻って海岸に出ると見ることができる」と言われた。外はすでに暗くなっていたので、明朝一番で行くことに決め、その夜は南方邸にだけ行くことにした。

日付が四月一〇日に変わった早朝、五時四九分の一番電車に乗り込んで二つめの南部駅に降り立った。海はすぐ近くというから歩いてみると五分くらいで海岸線に出た。

浜風は肌寒く、明けきらない日の出の浜辺一帯はまだうす暗さを残していた。南部湾一帯を望める砂浜に降り立ったとき、妻は何を目にしたのか身体をかがめながら叫んだ。

「お父さん　淳の誕生日だ！　石で書いた誕生日だ、四月九日だ！」

まさかここに息子の四月九日が書かれているなど、どう考えてみても信じがたいことなのである。だが目の前にはっきり「4月9日（土）」と、満遍なく小石を拾い集めて

描いてあるのだ。そして名前も書いてあった。
〝4月9日（土）ハシバ テツオ〟
という文字が、生々しく砂浜に浮き出して輝いていた。
小石の数はかなりの数量になる。
昨日描かれたものであろう。単身の男性の名前なのか、あるいは恋人同士なのかどちらかに違いない。〝ハシバ〟が女子の姓で〝テツオ〟が男子の名前なのかもしれない。そしてこの辺り一帯は、千里ヶ浜に続く海亀の産卵地でもあった。

千里ヶ浜の石の文字

（1）
4月9日誕生日
見知らぬ浜に来てみれば
石を並べて書いてある
4月9日と書いてある
ここは南紀の南部湾
千里ヶ浜の石の文字

（2）
4月9日誕生日
見知らぬ浜に来てみれば
石を並べて書いてある
4月9日と書いてある
いのちの愛が待っていた
千里ヶ浜の石の文字

（3）
4月9日誕生日

海をへだてた隣国の
せがれの安否思うとき
見知らぬ浜が呼んでいた
4月9日と書いてある
千里ヶ浜の石の文字

（3）
4月9日誕生日
海をへだてた隣国の
せがれの安否思うとき
いのちみちびく石の愛
千里ヶ浜の石の文字

偶然といえばそれまでの話になって実に風通しがよく、心は宙に消えていく。それでは偶然の姿をした現実の、真の姿が見えてこない。

偶然は外見の世界である。時計の針やデジタル表示の世界である。われわれが見ている表面世界と同じである。それらの原動力となる世界は内面にある。それは時計のメカニズムのエネルギーであり、人の心を支配する魂の世界が見えざる世界に明かりを灯しているのだと私は考えている。表の世界の原動力となる、いわば不可能を可能に組み立てることのできる世界だといえよう。

この世の誰も彼も、また何もかもが役者のようなものであり、その脚本家が魂であり、メカニズムであり、そして、いのちという絶対者が目を光らせている。それも昼夜無休で目を光らせているといえるのではないか。

見えぬ手で導くその姿が、具体的には見えぬとしても、見える手立てとする意志の代行媒体として、文字や数字や色彩を目の前に現し、共振共鳴共時性現象となって、現実に、この目に見せてくれる。それを偶然といってしまえば、いのちの真実は遠ざかるばかりである。電車のなかで息子の誕生日に親としての思いを一つにしたとき、〝想えば通わす命綱〟となって、天に届き、地にひびいたのだと思うのである。

4月9日（土）に千里ヶ浜を訪ねたハシバさんは、私たちとは何の因果も持つものではないかもしれないが、その姿を見ているハシバさんのいのちは、私たちの思いをキャッ

チしているように思えてならない。それは決して単なるたわごととは思えないのである。

宇宙を創造して、地球に生命を吹き込んだ宇宙生命を絶対調和のご意志と見るならば、その根源エネルギーでこの世に存在させられたわれわれのいのちにとって、人びとの因果に係わらず、個人個人の心を統御コントロールするくらいは容易千万なことであろう。

だからその、文字的、数的、色彩的現象体にいのちの意志を感ずるならば、ここ田辺の街に引き寄せられたことの節々に、そのご意志の機微を感じることができよう。

たとえば、4月9日に南方熊楠を訪ねること。車中で息子の誕生日を思い浮かべて安否を気遣うこと。宿の従業員が、「神島（かしま）」を「鹿島（かしま）」と誤って南部湾にわれわれを向かわせたこと。もしも本命の田辺湾の神島（かしま）のほうを教えてもらっていたら、「4月9日の石の文字」とは出会うことはなかったのだ。こうした微妙な食い違いでさえも、いのちの意志力は見逃すことはしない。これこそ「死んでも生きている魂」の証しといえよう。

因果性（因縁果）も非因果性をも越えた世界は、不可能を可能に組み立てることのできる世界だといえる。そのことは、宇宙生命の一大ご意志に委ねるほかはない。

表面世界は役者が役を演ずる世界で、内面世界が書く脚本を演ずるものであり、それらは脚本と役者の因果関係となるが、それ以上の深い生命次元のことは、因果も非因果も越えた果てしない命の統御次元に委ねるしかない。食べて呼吸をして生きている私たちは、この生命次元の総監督のご意志の下に生きるほかはないのである。

朝一番電車の五時四九分に乗ったことにも、〝四九〟の暗示性のひびきが強く秘められていたといえる。

南方熊楠は、動植物のどちらとも思える粘菌に打ち込んだ人物だ。熊楠から感じ受ける真意は、「生命の謎」の探求ではなかったのかと考えさせられる。熊楠は次のようなことを吐露している。

「今日の科学の因果は分かるが、縁はわからぬ。

この縁を研究するのがわれわれの任なり。

そして、縁は、因果と因果が錯雑して生ずるものなれば、諸因果相対の一層上の因果を求むるがわれわれの任なり」――南方熊楠――

ここでいわれる「諸因果相対の一層上の因果」云々というのは、非因果性の相関関係に起こる共時性現象とも私には受けとられる。共振共鳴共時性現象のことを、南方熊楠は考えていたのではなかったのか。いわゆる偶然の一致といわれる現象の奥に秘められ

たいのちの真相に的を当てていたのかもしれない。

因果の世界は果てしない。非因果の世界も果てしない。心の因果の世界は魂のひびきとなって、不滅の生命を証しつづけているのだと私は思うのである。

今回の旅では、大阪市東成区にある、わが国最古といわれている「鶴の橋」（第一六代仁徳天皇の世、平野川に架けられた橋）にも立ち寄った。そして、南部湾の千里ヶ浜は海亀の産卵地であることを、後になって知った。鶴と亀は私にとって魂の一部である。出会いの縁の深い意志性がここにもひびいていたのであった。

待っていた兎太郎と松ノ木峠

それは昭和六一（一九八六）年八月四日のことであった。山深き朝日林道を進んでいると、道の中央で、避けようともしない一羽の野性の兎が私に何かを語りかけていた。

（1）

お前さん来るのは先刻承知
決して見せない昼日中
いのちの親さまおしえてくれた
今来る人は安心じゃ
僕は朝日の兎太郎